

ボランティアに参加する人を増やすには

高久宝良 羽成ららこ
指導者 岡部真二教諭 浅野周一教諭

要旨

ボランティアには参加してみたいが、実際に参加したことはないという人が多いという現状を受け、ボランティアに参加する人を増やすには、人々が不安に思っていることや、注意すべきこと、疑問点に対する答えなどを明確に提示することが大切だと考えた。そこで、私たちはJICAや、宮城県庁にzoomでお話を伺い、人々の疑問に答えるためのヒントをいただいた。それらのことをもとにして、私たちは、ボランティアの楽しさだけでなく、大変なことなども提示したうえで、より多くの人に興味を持ってもらい、参加者が多くなるように働きかけていきたいと思った。

How to increase the number of volunteers

Takaku Takara Hanari Rarako

Abstract

By the fact that a lot of people want to take part in volunteer activities, but they have not taken part in, we consider it is important to clearly show what people are worried about, what people should be careful about, and the answers to their questions. Then, we listened to JICA and Miyagi Prefectural Government at zoom and got hints for answering people's questions. Based on these things, we show not only the fun of volunteering but also the difficult things, and we want to encourage more people to be interested in volunteer activities and increase the number of participants.

1. はじめに

(1) 動機

私たちは、小さいころにボランティア活動に参加した経験からボランティアの楽しさに気づき、双方に良い影響をもたらすボランティア活動に、より多くの人に参加してもらいたいと思いこの探究探究を始めました。

(2) 仮説

私たちが生活する中でボランティアに参加している人の話を聞くことは少ないと思います。日本では、良いことは黙ってするのが美德だと考えられているのも原因かもしれませんが、実際の総務省統計局のデータ

では、ボランティアに参加している人は全体で26.0%、15歳から19歳の私たちと同世代では22.6%とあまり多くありません。特に国際協力に関する項目は0.9%となっています。

そこで、私たちは、ボランティア活動に参加する人が少ない原因は、私たちがどこでどんな活動をすればよいのか知らず、実生活から遠い印象を持っていることにあるのではないかと考えました。そして、解決のためには多くの人に、どんな活動が私たちにできるのか、どれほど参加するのが難しいのか、あるいは簡単なのかを知ってもらう必要があると推測しました。

2. 研究方法と結果

(1) 土浦一高生を対象としたアンケート

まず、一高生を対象に実施したアンケート結果では、ボランティアに参加したいと思っている生徒が67.9%いるのに対し、参加したいと思っている生徒の中で、実際に参加したことがある生徒は50.7%となっています。(グラフA、B)

参加したいと思っているが、実際に参加したことがない人に理由を尋ねたところ、主な原因として、時間に余裕が無いことや、参加方法が分からないことが挙げられました。

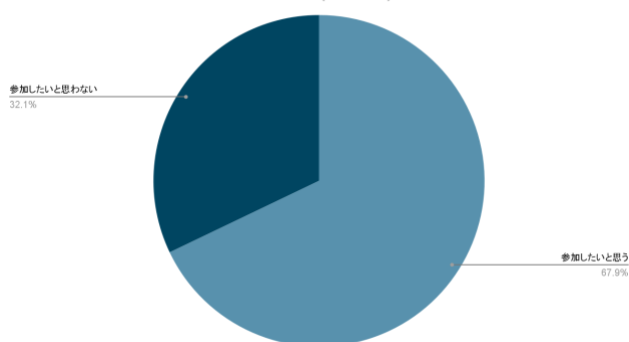
実際に参加した活動の内容として最も多いのが、87.7%を占める地域のごみ拾いなどまちづくりに関するもの、続いて子供関連、スポーツ関連、高齢者関連のものとなっています。

ボランティアをするメリットについては、達成感や自己肯定感が得られる、道徳心が育つ、社会貢献ができる、など数多くの回答をいただきました。今の自分の持つ役に立ちそうな能力については、コミュニケーション能力、体力、集中力、などたくさんの回答がありました。

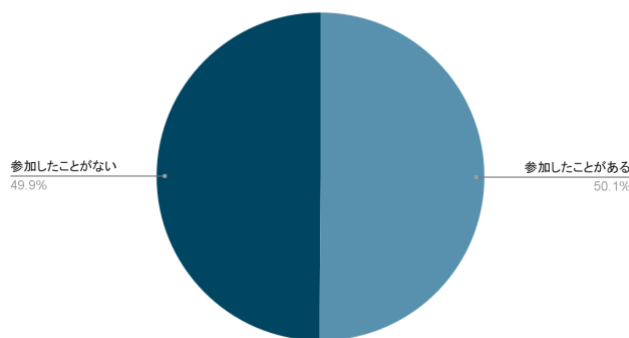
さらに、ボランティアのような活動をしている組織を知っているかという質問に対しては、52.9%の人が知らないと言っています。そのような活動をしている組織には、例えば、NPOやNGO、国境なき医師団、JICAなどがあります。

そこで私たちはJICA東北さんにzoomでお話を伺い、さらにJICA筑波、東京、横浜の合同体験談りレーに参加させていただきました。

Q.ボランティアに参加したいと思うか？(グラフA)



Q.実際にボランティアに参加したことがあるか？(グラフB)



(2) JICAの方々に伺ったお話

(a)JICA東北、遠藤さん

(b)JICA東京、佐谷さん

(c)JICA横浜、佐野さん

● 海外協力隊

政府開発援助（ODA）の一環で、途上国などの発展や復興に貢献できる人材を派遣している組織で、派遣先となる国はおよそ100か国、今までに派遣された隊員は5万人以上にのぼります。（c）

● JICAの活動

移民の日系人の支援や研修員の受け入れ、民間事業との連携、その他ボランティア活動も行っているそうです。それ以外にもJICAの活動を広報したり、応募を希望する方の相談に乗ったりしています。（c）

● 動機

海外への漠然とした興味など、簡単な動機でも参加できます。（b）

● 派遣される国の選び方

国で選ぶか、仕事で選ぶか、言語で選ぶかの3通りがあります。これら3つは必ずしも一致しません。それぞれの国に応じて必要とされてるボランティア活動が異なるためです。だから、優先順位をつけておいたほうがいいようです。（b）

● 仕事内容

仕事は190種以上あり、誰でも自分に合った仕事を見つけることができます。JICAの期限は2年なので、何かを大きく変えることは難しいです。そこでネガティブになるのではなく、すべての経験が自分のためになるという意識を持ち、自己本位にならないように現地の人と接し、活動するべきです。また、技術の伝授など、自分がいなくなった後も残る仕事をすることは大切です。（a）

● 家

生活費とは別に家賃も別にもらえます。ホームステイの場合もありますが、安全基準を満たした家にしか住めないことになっているようです。（b）

● 研修

就職前と帰国後の文化や言語の研修があります。また、現地に日本の事務所がいくつかあるので、助けが必要な場合は頼りにできます。派遣前の訓練や訓練派遣中の手当があり、活動中は現地の事務所や学校、病院が協力してくれます。（a, b, c）

● 仕事とボランティアの違い

ボランティアだと、派遣元が守ってくれることが多いので安全性が高いですが、貯金がたまるわけではありません。また、現地に行って実際に活動することがメインです。一方、仕事にするなら、例えば国連に入るなら、10年間の海外派遣があるようで、結果を出さなくてはいけないという責任が生じます。仕事の内容としても事務所の管理など、裏方的なものまであったりもするようです。（a）

● ホンジュラスの課題

予防啓発ポスターの内容が、ネットで簡単に見つかる写真を張っただけでロクな説明も書かれていないことや、授業でも正しい知識を教えることができないという現状、人によって知識の差が大きすぎることが挙げられていました。そこで予防啓発活動の質を向上させるため、オリジナルポスターを制作したり、クイズなどを用いた体験型授業を行ったり、先生たちへの授業を行ったりしたそうです。また、学校での保健の授業を増やしたり、手洗いの方法などを実際にやって見せるなどしたそうです。授業後に子供たちが行列を作って手を洗っている姿を先生が写真に撮って見せてくれたときはとてもうれしかったとおっしゃっていました。（b）

● エチオピアの課題

卓球の技術指導をしていたエチオピアンユーススポーツアカデミーの設備はしっかりしていた一方で、放課後のクラブでは練習環境が整っておらず、卓球について書かれた本は当時エチオピアにコー

チ向けの一冊しかありませんでした。佐野さんはルールや技の基本を示した20ページほどの卓球の基礎の教本を作り、地域の子供たちに配布しました。(c)

● 文化面交流

ホンジュラスではダンスが人気で、地域によってさまざまな特色があるようです。日本の盆踊りを見せたり、法被をプレゼントしたらとても喜んでもらえたといっていました。現地の生活は、文化が異なることもあり学生の感覚では難しく、特に用いる言葉が違うのが最も大変なのだそうです。治安は日本人が一人でいても問題ないくらいには悪くないですが、夜暗くなってから出歩くべきではありません。携帯電話をひったくられるなどすりが出ることもあるため、ポケットではなくリュックやシークレットポーチに貴重品を入れなければならず、不便な点もありました。(c)

● 協力隊の活動に参加する中で学んだこと

プランB、Cを準備し柔軟に対応すること、慣れない言語でも正確に伝えること、スマホやネットがなくても人とつながり、動くことが大事だと学んだとおっしゃっていました。(b)

● 感染症等の病気

少ないけれど、マラリアにかかった人や、野犬に噛まれた方もいたと聞きました。現地の動物は狂犬病を媒介する危険があるため恐ろしく、佐野さんも野良犬に追いかけられる苦痛を経験しました。(c)

(3) 宮城県庁の方に伺ったお話

各都道府県や市町村には、友好関係を結んでいたり、姉妹都市関係だったりする海外の市や州があります。そこで私たちは宮城県庁の永澤さんに、宮城県と姉妹都市関係を結んでいるアメリカのデラウェア州やジェットプログラムについて話を聞きました。

宮城県とデラウェア州との間では、特にボランティア活動をしている訳ではなく、日本食を伝えたり、売り込みに行ったりする経済交流や、大学生の交換留学や、手紙などのやり取りをする教育交流、が主だそうです。しかし、東日本大震災の時にはデラウェア州は、州知事のリーダーシップのもと、募金活動をしたり、デラウェア州出身のバイデン大統領に励ましの言葉をもらったりもしたそうです。宮城県は経済交流がしたいと思っているのに対し、デラウェアは教育交流がしたいと思っているようで、うまくいかないことも時々ある。交流がしたいと思ったら、まず、自身の魅力を知り、うまくPRすることが大事とのこと。人とのつながりが交流の土台で、人同士の交流が何より大事だと言っていました。

最後に、アメリカで大々的に行われているジェットプログラムについてです。活動としては、大学卒業直後頃の若者をALTとして派遣、子供たちとの交流、日本での就職の斡旋、などがあります。

具体的には、「#おにぎりアクション」というタグをつけてSNSに投稿すると子供たちの給食にお金が付されるという仕組みや、ジャパンデイというセントラルパークで行われるお祭り、美術館にある日本美術を通しての交流などがあります。

大きな特徴として、非営利で活動していることや、ジェットプログラムを終えた卒業生に協力を仰ぎ、事前講習会を行ったりしていることが挙げられます。

また、アメリカ全体で見ても、組織化して寄付金を集めて意欲的に活動しているため、大きなボランティア活動をすることができるようです。またお年寄りも病院の案内など、自分たちにできる活動を探して実行していることを知りました。

しかし、日本でも全く同じことができるかと問われれば答えはNoです。日本語の需要は英語より低いいため、海外で教えるという活動はどうしても少なくなってしまう。それでも、似たような活動をしたいと思っている人達と情報のやり取りをしたり、自分に出来ることを探したり、私たちが見習えることは沢山あります。

3. 考察、まとめ

協力隊の活動に参加する中で、プランB、Cを準備し柔軟に対応すること、慣れない言語でも正確に伝えること、スマホやネットがなくても人とつながり、動くことが大事だと学んだとおっしゃっていました。

以上のことから、私たちが国際的なボランティアに従事する際、不安に思うことや疑問になることに、いくつかの答えを出すことができました。

1つ目はどんな人でも活動することができることです。私たちがお話を伺ったJICAでは学生でも、自分が普段からやっているスポーツを教えたり、日常的に触れている日常的に触れている日本語や日本文化を紹介したりできるそうです。どんなことでも自分ができることを精一杯やり、大きく変えられなくても何かを残すことが大切だと学びました。

2つ目は発展途上国とはいっても、生活は安全で健康的なものが保証されていることです。例えばJICAでは、現地の事務所の職員や警察、病院から注意点の説明や支援を受けられます。また、極端に治安の悪い地域には派遣されないため、日本人が1人で外を出歩くことも可能です。

3つ目に自分本位の活動にならないように注意することです。可哀想な人たちに教えてあげるわけではなく、交流や技術移転の面が大きいので、上から目線になってはいけません。そのほかの点では人間関係を大切にしたり、現地の生活環境や習慣に慣れたりなど当たり前のことも含まれます。

4つ目に学校への協力など、倍率が高い活動については教師免許などの資格があったほうが有利だそうです。

以上のようにこの研究を通して、多くの人が疑問だった具体的な活動の内容や注意点を明確にすることができました。また、「知らない活動」に対する不安を少しでも減らすことができたとおもいます。身近なボランティア活動に参加したことがある人にはもちろん、今までにそういった活動に参加したことがない人にも、海外でのボランティア活動に興味を持っていただき、遠い世界のことだと思っていたボランティア活動に積極的に参加してもらえるようになることを望みます。そのために私たちにできることは、実際に参加してみた人たちの意見をまとめたものやボランティア募集の広告などの掲示をしたり、地域で行われているボランティア活動を紹介したりしていくことだと考えます。また、楽しいことだけでなく、難しいことや大切なことも伝える必要があると感じています。

今後もボランティア募集の公告を行うなど、この問題を解決する方法を模索していきます。

4. 謝辞

今回、電話やメールのやり取りからzoom対談まで行ってくださったJICA東北職員の永澤サマ、さまざまな体験談をお聞かせ下さったJICA筑波、東京、横浜の職員の皆様方に御協力頂きましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。